

# デフラグメント



真下 魚名

山、トンネル、山、トンネル、・・・畑、海、畑、海、畑、  
そして時々家。

山陰の海沿いを走るローカル線は、山と海に隔てられた集落と集落を  
縫い針で突き刺すようにつながっているようだ。

中国山地の緑ばかりの山並みを抜けて、青黒い日本海を目にしたときは  
それなりに感激したけれど、こう、海ばかりでは飽きてしまう。

というより、僕はこの旅行をかなり後悔し始めていた。

新幹線から在来線を乗り継いで、もう九時間以上電車にゆられている  
ことになる。いつになれば僕は目的地にたどりつけるのだろうか。

退屈なだけなら眠ればいいのだろうけど、初めての土地でその上に一人旅だ。  
眠り込んだまま乗り過ごしてしまうのが不安で、少しまどろんだ以外はずっと  
起きている。

何度も電車を乗り継いで、そのたびにまごついて。

いま乗っているのは電車ですらない。

こういう、心の中でぶつくさ言う性格は、全く好きじゃないな。

あと何時間揺れていればいいのか、直前に駅中の本屋で買い込んだ  
ポケット時刻表を見ても、なんだか良く分からない。電車旅行をする人は、  
これを持ち歩くのだと思いこんで買ったのだけれど、この分厚い冊子の  
僕に必要な部分が、十ページに満たないことに暫くして気が付いた。

大体のところ、今どの辺りを走っているのかすら分からない。

いや、考えれば分かるし、おおよその見当も付いている。けれども、  
僕の脳みそはそのことについて、精密に考えることを拒否している。

自分の脳が、自分の主張を否定するなんて。まあ、僕の場合  
珍しいことではないけれど、出来ればもっと単純な性格に生まれたかったよ。

でも、左手に見える大きな山は、おそらく「大山」という山だ。

この旅を計画したときに、一応地図は見て、大体どの辺りまで行くのか

ぐらいの目当てはつけてきた。

その目処となりそうなのが、山陰の海に出るとそれと暫く平行して走り、「大山」という山が現れたら、その裾野の広大なエプロンの端にそれはあると。

最初にそう思ったのは、十年ほど前になるのかな。

その時は、日本地図を見て、あまりの遠さにあきれて、そこまで旅をするお金もなかったしあきらめたんだ。

それから何度か、人生の変わり目になるたびに、同じ事を思った。

だから、後いくつか駅を過ぎれば、この二両編成のディーゼルともさようならだ。そして僕は電車を降りて、・・・降りるのはいいが、この列車にもう一度乗るのはご免だな。この横揺れと、そしてディーゼルの音と匂い。

本当に、もう飽きたんだよ。

この旅を後悔することにもね。

「櫟木。」

僕の名字を廊下で呼び捨てにする女子は、宮古ぐらいしかいない。

呼び捨てにされて、振り向くのも癪だけど、後になってから無視したとか、なんだとか、言いがかりをつけられるのも面倒だ。

いやこの場合は言いがかりではなくて事実だけれど、とにかく面倒だ。

「何？」

「アンケート、もう書いた？」

「何の？」

「進路調査！ 他に何かある？」

怒るなよ。ほんと短気なんだから。

「宮古は？」

「まだだけど。 ねえ、アタシが先に訊いたんだよ。質問に質問で答えるのは失礼だよ。」

人の進路をいきなり訊くのは失礼じゃないのか。

「もう、とっくに出したよ。」

「はやー。 進学？だよね、どこにしたの。」

キメつけられてもね。ところで、どうして僕たち、三階の廊下で、近所のおばちゃん達みたいに立ち話しないといけないんだ？

まあ、宮古なんておばちゃん予備軍だけどな。将来絶対、どっかの家の前で、自転車止めて延々話し込んでそうだ。

もう帰りがけだったから、カバンも持ってるし。

「ヨータ、寄り道すんなよ。」

「ヒトを小学生扱いするなって。」

なんて、冷やかして過ぎていくやつもいるし、とっとと帰ろう。

それにヨータじゃなくてヨウだよ。オレの名前は。

「広野。」

「私立は？」

「受けない。」

「どうしてよ。」

「どうせ行かないし、広野だったら普通に受かるよ。」

「やなヤツ。」

「何がー。」

「“広野だったら普通に受かるよ。”とか言うし。」

部活のない放課後にも慣れてきた。これから卒業までには文化祭ぐらいしかイベント無くて、だから三階の廊下なんて、六時間目の後のホームルームが終わったら、箒で掃き出すように人がいなくなる。

「あーあ、アタシはこれから必死で受験勉強だって言うのに。」

これから、ってというのが遅いんだって。

「宮古はどこ受けるの。」

「水沢女子と太田。」

「どっちが本命？」

「水沢かな。共学行きたいけど、太田の男子ってイケて無くない？」

知ってんのかよ。イメージだけじゃないの、それって。

「水沢は制服可愛いし、それに偏差値高い男子校とも付き合いあるって、先輩が言ってたから。」

女って現実的。

つまりその先輩って人から見ると、太田高校の男子生徒はイケてないって事か。

「櫛木だったらさ、もっと上の学校狙えるのに。どうして広野？」

「広野もそんなに悪くないよ。それより、オレンち姉さんが来年大学受験だから、オレが金のかかる私立なんかに行くわけいかないの。」

「ふーん。」

「先輩、たまには練習来ないですか。」

靴箱に、履き替えたばかりの上靴を入れようとしてたら、後ろから声をかけられた。

振り向いてみたら、ああ、なんだか。ウエアがまぶしいよ、新部長。

「受験、受験、受験。」

「あれ、推薦蹴っちゃったんですか。」

「誰かが勝手に、そんな噂流しただけだろ。公立受けるんだよ。」

「じゃあ、テニスは？」

「高校に部活があればやると思うけど、しばらく封印だな。放課後の時間を楽しみたいって言うのもあるし。まだどうするか決めてない。」

「お待たせー。よっ、近藤キャプテン。」

よっ、じゃないだろ。女の子が。

「宮古先輩。お久しぶりっす。」

「秋季大会イケそう？」

「どうっすかねー。櫟木部長って言う、柱みたいなのが抜けちゃったから、いまいち、まとまりが悪って言うか。苦労してますよ。」

「それは誰でも一緒だ。この時期はそうだって。」

・・・それで、こんなとこで待ってたのか。

「じゃあ、アタシが抜けた穴は？」

「ああもう、やかましいのは二年にもいっぱいいますから。」

「こいつ生意気！ 卒業試合の時見てなさい。ぼこぼこにしてやるからね。あー気分わる。帰ろ！櫟木。」

いやあ、新部長。それだけ言えれば大丈夫だよ。

「ま、頑張れな。そのうち顔出すようにするよ。」

「ハイ。よろしくお願いします。」

ん、まだ何かあるの。

「お二人って、やっぱ付き合ってるんですか。」

いきなり前衛スマッシュかよ。

「そうだよ。」

そうなのか！初耳だぞ、宮古。

「アー、やっぱり。2年女子には内緒だな。じゃあ、先輩。  
受験勉強頑張ってください。」

なんだか、変な納得の仕方して運動場に走っていったけど、  
そんなに簡単にヒトを信用して大丈夫なのか、新部長。

校舎を出て、東側にある自転車置き場は、大きなポプラの並木に  
守られている。

まだ夏って感じだけど、木陰で風が吹いていたりすると、それほど  
暑くない。夏のコートの上でじりじりと焼かれるのに比べたら  
全然まし。

宮古がこっちについてきたって事は、後ろに乗っけろって事だな。  
さっきから大人しげだけど。

「櫟木と一緒に高校が良かったなあ。」

悪いけど、そういうの考えたこともないな。

「また一緒にテニスやりたかったなあ。」

「広野は共学だぞ。」

「偏差値高すぎ。私には無理だよ。もうちょっと落とす気無い？」

「宮古とテニスするためにか？太田の男子イケてないって、言ってた  
じゃないか。」

「そうなんだけど、さ。」

三年間乗り続けたからか、チャリはちょっとぼろくなってきた。  
中学に入ったときに買って貰って、もともとはぴかぴかの銀色だった  
のに。

僕はその自転車が嬉しくて、自慢で仕方なかった。だから月に一回は、  
スポークの一本一本まで、古いタオルで磨き上げたものだ。

そんな僕をオヤジは笑った。

“自転車なんて、水でもぶっかけとけばいい。”

そういうと、本当にホースの先を指で塞いで、水を勢いよく絞り出す。

確かに水滴のついた自転車は綺麗に見えるけど、排気ガスや油の汚れなんて全然取れてやしない。乾いてしまえば、元の薄汚れた自転車に逆戻り。しかも、水滴が乾くまでは、ワックスすらつけられなかった。

「校門出てから。」

僕の肩を手で掴んで、後ろ立ちに乗ろうとする宮古をすんでの所で制止した。

「えー、いいじゃない、ちょっとだけなんだから。」

「宮古が良くても、チャリ通禁止になったらオレが困るよ。」

「ケチ、ケチケチケチ。」

ケチで上等、何とでも言ってくれ。

でも校門出たら、先生達の管轄外。ウルサイのはどっちかって言うと・・・、

「ひゅーひゅー。」

とか、冷やかしてるつもりなんだろうな。同じ学年でこのレベルの低さがオレは嫌だ。

あいつら一体何のつもりなんだろうな、それが楽しいのか？

僕はそんなことされても、恥ずかしくないぞ。店先でだれてないで、早く帰れって。

宮古は、って言うと、絶対調子に乗ってるだろな。どんな顔してるのか、後ろに立ってるから良く分からないんだけど。

どっちかって言うと僕は、顔を赤らめて下を向くような女の子が好みなんだけど、宮古のことだからきっと、おでこ全開で笑ってやがるんだろうな。

「止めて。」

「え、なに？」

「止めて！」

なんだよ急に。



二人乗ってると止めるのが難しいんだよ。重くて、ブレーキを思いっきり握らないといけない。まあ、間違っても女の子に重いなんて言わないけど。ワイヤーを通して、ブレーキのパッドが悲鳴を上げてるのが伝わってくる。

自転車ががくっと揺れて、宮古の靴音がした。こんなところで、どうしたんだ。

田圃の稲は、ついこの間までまっすぐ上を向いていたのに、少し黄色に色づいて穂をたれている。宮古はそんなふうに顔を伏せて泣いていた。

こんな時、どうしたらいいのか分からない。十五の夏ではそんな経験はないし、学校でも教えてくれない。少し考えて、ハンカチを渡すだろう、と思った。

今日のハンカチは水色とベージュののチェックだから、まあ、恥ずかしくはないか。

「・・・あいがと・・・。」  
変な日本語。

「どした。」  
一応、気遣って、優しく言ったつもり。  
「何でもない・・・。」

そんなわけないだろう。宮古の泣き顔なんて、初めて見たのに。何でもないって言ってるけど、今にもまた泣き出しそうな顔してるし。なんていうか、下瞼に涙がたまって、ほっぺたがちょっとふくれてるような、そんな顔。

何でもないって言われてもね。

「コレ、洗って返す。」  
「そんな気使わなくて良いのに。どうせ洗濯機に入れるだけだから。」  
「私が困るの！鼻水ついちゃったし。そのまま返せるか、バカ。」

・・・母さんに気づかれなけりゃ良いけど。ハンカチどうしたの一って。そんなこと、どうだっていいのに、細かいことばっか気がつくよな。。

「帰ろっか。」

「もう、良いのか？」

「うん。全然良くないけど、どうしようもないし。」

分からん・・・。

御厨駅には想像していた以上の立派な駅舎があって、僕は少しホッとした。

もし駅舎のない駅だったら、帰りの切符をどうすればいいのか分からなかったからだ。

電車の中で買い求めるのか、それもどこか近くの大きな駅までしか買えなかったりとか、まあ、いろんな事を想像していた。

今日、ここに来るまで、随分長い間思い悩んで、ようやくここにたどり着いたところなのに、もう帰りのことを考えている。

どっちかというと、帰りたい。

それはともかく、空の青さに駅の茶色っぽさって、ローカル線臭が漂うな。本当は灰色のはずのコンクリート部分まで、細かなサビが染みついているという感じ。光ってるのは毎日車輪が磨き上げる、鉄路の半分の部分だけ。

地図で見ると、北に何分か歩くと海がある。そういう、日本の果てに来てしまったんだな。

“ご乗車ありがとうございます。”

「あ、はい。」

改札で声をかけられるなんて、びっくり。自動改札しか通ったこと無いからな。あのドスン、ボタンじゃなくて、こういう改札もあるんだ。

それにしても、この様子では駅前にも宿泊場所なんてなさそうだな。いきなり押しかけて、泊めて下さいは無いだろう。僕だったら絶対追い返す。

近くの米子はわりと大きい市だし、そこまで行けばビジネスホテルだってあるだろうから、その手があると目論んではきたけど、そこにどうやってたどり着くか、心配になってきた。

御厨に着くまでの不安。着いたら着いたで不安。

似合わない、一大決心をして来なければ良かった。

朝はかなり早く出てきたんだけど、もう3時を回ってしまっている。

蝉が啼く。クルマは通らない。  
日陰が少ない。人を見かけない。  
もう一度時計を見る。間違いなく、午後の三時だ。

地方では、午後七時を過ぎると店が閉まるって言うのを聞いたことがあるけど、この御厨では三時を過ぎると人がいなくなるらしい。  
ますます、不安になってきた。

待てよ、店自体あるのか。この3台の自動販売機が全てじゃないだろうな。

地図をみて、大体の位置関係は把握してきたつもりなんだけど、  
駅前に立つだけでは分からない。海とは反対の山側だったから、こうグルーっと  
回って、・・・あっちの方か。そうか、大山を目標に考えれば良いんだ。

さあ、歩き出そうって思うと、旅行カバンを肩にかけ直したくなる。  
そんなに気合いを入れなくて良いのだけれど、初めての場所で、人通りが  
ないというのが何とも心細い。

もっと寂れたところを想像していたんだけど、家はそこそこ建っている。

あの赤く丸い電球は派出所だな。訊いてみるか？

“千田さんのお宅はどちらでしょうか？”

理由を聞かれたら、どうこたえるか。ここはやはり、先生の教え子です、  
だろうな。

このまま、一時間も二時間もさまよっているうちに、日も暮れてくる  
だろうし、ましてこの暑さだ。  
駅でお茶買えば良かった。

“先生の教え子が何で、”とか訊かれたりしないだろうな。

暫く日本を離れることになったので、はちょっと嘘っぽいか。

待てよ、僕って、こっちの方言全然話せないし。教え子ですって言うこと自体、  
嘘っぽいぞ・・・。

でも、暑い。お巡りさんに訊こうっと。

“ただいま警邏中です。お急ぎの方は、携帯にお電話下さい。”

110番で、一体何のためにあるの？  
犯罪なんて、おこりようもない街なんだろうな。  
仕方ない、もう少し一軒ずつ表札をみて歩くか。

あっちい。

あれって、柿の葉だろうな。下を見たら、まだ青くて小さいのが、  
ころころと道路に転がっている。小さいけど、柿の形だ。

さるが青い柿を投げつけるのって、“さるかに合戦”だっけ。  
あの話し嫌いだったな。

サルがカニを痛めつけて、ハチとクリとウスがサルを痛めつけて、  
いたわる人が誰もいない。

あの話、今でも嫌いだ。子供には聞かせたくないな。そういうのは、  
もっと先の話しだろうけど。  
小さな木陰だけど、それでもありがたい。

あ、誰か来る。  
自転車だ。女の子だな。中学生ぐらいか。

ちょっと声かけにくいけどこの際だ。背に腹は代えられない。  
これ以上無駄に歩いたら、行き倒れるし、まあ、サラリーマンに成ってから、  
恥はもう十分かいたさ。一つや二つ増えたところで、大勢に影響はないよ。

「あの、すみません。ちょっと道を教えてもらえませんかあ。」

・・・って言ってるのに行き過ぎた。  
あのヤロウ。・・・と思ったら止まった。  
随分向こうから、引き返してくるな。

「すみません、自転車久しぶりなんで、ブレーキのきき悪くて。」  
いや、キミいま確かに躊躇したよね。止まるべきか否か。  
「いえ、こっちこそ急に呼び止めてすみません。」

廻りが静かだと、声が良く聞こえるな。

「どちらかお探しなんですか。」

中学生だと分からないかも知れないな。僕が中学生の頃なんて、近所でも友達の家ぐらいしか知らなかったし。

「千田さんてお宅搜してるんですけど。」

「千田、誰ですか？」

田舎だから、同姓多いのかな。

「千田 庸太郎さん。」

どうかした？

「そらあ、うちの事ですけど……。」

冗談でしょ。いきなりそれはないよ。ご都合よすぎますって。

そこまでは望んでないし。

「わたし、いま買いものの途中で駅前まで行きよりますんで。」

「いや、大体の場所さえ教えてくれれば……。そう遠くは無いんでしょう。」

ちょっと、嘘だろ。まさか、そんな。じゃあ、この娘って……でもそうとは限らないか、うーん。

「あと三分ほど、この道をまっすぐ行きなされば。」

「ハイ。分かりました。行ってみます。」

参ったな、予定外だよ。

「でも一、おとやんは、いま家にはおんならんですけど。」

そうか。いないのか。

家まで行って、いなかったらそのまま帰るつもりだったんだ。

何ヶ月も前から計画したはずなのに、最後のつめが締まらないシナリオだよ。

まあ、ちょっと、自分の中のわだかまりに、トドメを刺したかったんだな。

ここまで来るって言う大仕事をするのが、目的だったのかも知れない。

砂丘でも眺めて帰るかな。帰りは夜行バスなんてのも、いいかも知れない。

もう電車は懲りたよ。

「でも、夕方にはいぬる思いますんで、待っといして下さい。わたしも、急いでいんで来ますよって。」

はい？

「ここ、まっすぐです。左側。楓の枝がはみ出てる家です。」

楓の枝がはみ出している家、か。

多分、そういえばこの辺りでは通じるんだらう。そこまで言われて、見つけれませんでしたと帰れないような気がしてきた。

図形の問題は苦手だ。

時間がかかる上に、配点が大きそう。出来れば飛ばしたいのに、  
零点だと、何をいくら頑張っても90点に届かないかも知れ無い。

苦手だと思うと、本当に苦痛になってくるな。みんなはこういうの  
どうしてるんだろう。

「ヨウ。遅くまで頑張るのね。」

「ん。」

「コーヒー入れてあげようか。」

そうだ。

「姉さんコレ、解き方教えて。」

何か、いま一瞬嫌そうな顔しそうになったぞ。

「アー、図形か。しかも補助線を引くヤツね。悪いけど姉さんは文系なの。

しかもヨウがやってるのって、広野レベルだったら解けなくても大丈夫だと思  
うよ。」

「あ、めげそう。」

「ヨウはさ。頭良いんだから御堂にすればいいのに。そうすれば、  
その勉強も無駄にはならないよ。」

なんて姉だ。自分が出来ないのを弟の志望校問題とすり替えるなんて。

「オレ、ガリ勉て嫌いなんだよ。」

「“ガリ勉”って、ウチの学校にもアタマのいい人いるけど、別にガリ勉  
ていう感じじゃないよ。御堂も多分そう。そういうステレオタイプな  
見方って良くないと思うな。それとも、学校でそんな風に言われてるの、  
ガリ勉とか。」

すてれおたいぶ？ なにそれ。

「面と向かっては言われたいけど、陰でそういうことを言うヤツはいる見たい。」

「言わせとけばいいじゃない。」

「そうなんだけど・・・。」

「どうせ僻んでるだけなんだから。ヨウはちゃんと勉強して、大学行くんだよ。」

「オレ大学行かないし。高校卒業したら運送屋やる。」



「それって・・・父さんの後継ぐって事？」

「うん。」

口に出して言うのは初めてだけど、そう思った。別に運送屋をやりたいてわけじゃないけど、他に知らないし。高校卒業したら就職だ。姉さんと僕と、二人も大学に行かせる余裕はないだろう。

でも、今の姉さんの困ったような顔、それ何？

「ちょっとコーヒー入れてくる。飲むでしょ。」

「うん。」

姉さんが下に降りていく足音がして、僕の机の上には、何の進展もない図形の問題が残っままだ。どこかに線を入れないといけないというのは分かってて、大体この空いたところに引くんだらうという見当は付いているんだけど、そこから先がなかなか進まない。

こういう問題を作る人のアタマってどうなってるんだらうな。

「はい。」

「ありがとう。」

ふー、生き返る・・・っていうのは大げさだな。まだ死ぬほどはやってないし。あれ、二つ？姉さんの分？

「千紗ちゃんとは上手くいってるの？」

なんだよ急に。図形の問題と関係ないだろ。

「上手くいってるって言われても、・・・チャリで一緒に帰ってるだけだし。」

「それだけ？」

「他になにすんの。」

「ま、そうだよ。中ポーだもんね。」

「あ、でも。この前、道端で突然泣き出してびっくりした。」

「千紗ちゃんが？」

うん。

「へえー、そうなんだ。ヨウ、何か言ったの。」

「うーん、いつもみたいに自転車漕いでただけだよ。それ以外は、学校出るまでは乗るなって言って、その前は、・・・志望校の話しかしたかな。聞かれたから。」

「千紗ちゃんどこ受けるって？」

「なんとか女子。」

「“なんとか”女子ね。ヨウちゃんらしいな。そっか、それで泣いちゃったのか。」

わからねー。なんとか女子へ行くのが、そんなに大問題なのか？

「女の子は案外現実的なの。」

千紗ちゃんは、今みたいな時間がずっと続けばいいと思ってるのね。

でも、肝心のヨウちゃんはあっさり別の学校に行くって言うし。

・・・ていうことは、ヨウは千紗ちゃんほどには相手のことを思っていないって事だ。」

「別に付き合ってるわけじゃないよ。」

「ヨウはそう思ってるんだよね。でも、千紗ちゃんはどうかな？」

え！

“お二人って、やっぱ付き合ってるんですか？”

“そうだよ。”

冗談だと思ってた。あれって、間接的にコクられたんだ。

「何、そのげっそりって顔。千紗ちゃん可愛いじゃない。ちょっといないと思うけどな、あんな良い子。」

「そんな風に考えたこと無かったから。」

「えー、びっくり。子供の時からバレバレだったよ。部活だって、ヨウがテニスやるっていったからに決まってるじゃない。

私も、可愛い弟のために一肌脱いださ。」

また、余計なことを。

「それとも、他に好きな子いるの？」

「いない！」

でも、そういう問題じゃないだろ。あー、なんか顔が赤くなってきた。全然気づかなかったのが恥ずかしい。でも、姉ちゃんはその知ってたのか。

「千紗ちゃん可哀想に。子供の頃から思い続けた男がこんなヤツとはねー。」

「しょうがないだろ。そういうこと考えたことないし。そんな遠くに

行くなってわけでもないんだし。」

「そうだよ。タイミングの問題なんだよね。女の子は男の子より早く大人になるから。だからさ、千紗ちゃんのためにも、ヨウはちゃんと大学行って就職しないとダメだよ。」

それ、ぜーんぜん関係ないし。

「運送屋に大学は要らないよ。」

「父さん、ヨウには後継がせないって言ってたよ。」

「なんで？」

「運送屋は、いま経営が大変なんだって。それでこれからもっと大変になるって。

ヨウが大人になる頃には、うちみたいな個人の運送屋は、食べていくだけで

精一杯になる。運送屋はオレ一代で終わりだって言ってたよ。」

「運送屋だけが仕事じゃないし。」

「ダメ。ヨウはちゃんと大学行くの。あなた、余計な気を回すからいっとくけど、お金のことは心配なくていいから。ヨウが大学に行く頃には、お姉ちゃん、短大出てOLやってるし。そうすれば、ヨウが4年間大学行っても大丈夫だよ。」

「そんな。姉ちゃん大学は？」

「最初からその気ないもの。」

そんなこと言われても。

「ヨウは私と違って頭良いんだから。それに、姉ちゃんは、ヨウが

立派になるのを見るのが楽しみなの。

そうだ、今年も文化祭来るでしょ。去年は評判良かったよー、

あの可愛い子誰？紹介しろーって。

目一杯見せびらかしちゃうもんね。」

「一人でそんなこと決めちゃって、ずるいよ姉ちゃん。」

だって、いつだって僕が後出しになっちゃうから、姉ちゃんばかり損してるじゃない。

「一人じゃないよ。父さんにも母さんにもそうってあるの。あの二人、仕事だ仕事だって、子供の面倒全然見ないじゃない。だから私が考えて、そうすることにしたの。」

ずっとそうだった。

お祭りに行くとき。中学校の制服をあわせに行くとき。授業参観に来るって言ったときには、さすがにそれは止めてくれてって言ったけど。いつも姉ちゃんが面倒を見てくれた。

まさか、おむつは替えてないよな。

「でも、高校は広野に行く。」

「うん。決めるのはヨウだから、それでいいよ。」

ほんとだ。焼き板塀と上の横木の隙間から、まだ青々とした楓の枝がはみ出ている。

“千田 庸太郎”か。

居ないのが分かっていると、気が楽かも知れない。

小さな門の格子戸を横に開くと、玄関までの石畳とその廻りの苔の青さが目に入った。

打ち水をしてある。

それだけで、少し涼しくなったような気がした。

「ご免下さい。」

はい、という女性の声が聞こえ、廊下をスリッパがすれる音がする。棧の多い磨りガラスに、人影がぼんやりと透けて見えた。

相手を確認もせずには不用心というか、無防備というか、開けていいのかなと思う間もなく、引き戸の隙間から難しそうな女性の顔が見えた。

「櫟木さん？」

「はっ？」

どうして僕の名前を知ってるんだ。

「はい。」

「良かった。あてっぽ言うてから、間違えたらどうしようかと思ひよった。」

「どうして、ご存じですか。」

「おまいさんの、おかさんから電話があったのよ。もしかしたら、顔を出すかも知れんて。」

かあさん、そんなことしたのか。

黙ってきたのに、意味無いよそれじゃ。

「おとさんは出掛けてるけど、上がってまっとりなさい。」

「いえ、あまり長くなると帰れなくなりますから。ご不在でしたらこれでお暇します。」

「何、あずがわからんこと言いなさる。なんのため、こんな田舎まで来なった。会わんで帰るげな、あらあせんでしょ。」

反論の余地はない。ただ、僕の意気地が無いだけだ。

客間に通された。

どこもかしこも開け放たれていて、エアコンの代わりに、旧式の扇風機が首を横に振っている。

僕も、今の境遇を否定したい気分だよ。

「遠かったでしょう。」

グラスコップに入った麦茶は、冷たくて気持ちよかった。そのまま暫く、額にくっつけていたいほど。

「一生分、電車に乗った気分です。」

ちゃんとした障子なんて見たこと無かったよ。板張りの天井も、あめ色になった木の柱も。

次の部屋の奥には仏壇が置いてある。田舎の家って、何処もかしこもしっかりと作ってあるな。

「里美とすれ違わなんだ？」

ああ、さとみ、って言うんだ。

「道を聞いてしまいました。千田さんてどこですかって。」

「そりゃ、良い子に聞いたもんだ。」

あはは・・・、か。

「彼女って、ひよっとすると。」

そうだ、というように頷いた。

「彼女は知ってるんですか。」

もう一つ。

「そっか。知らなかったな・・・。」

「ずっと、おうて無かったからね。」

静かだった山裾に日が陰って、町を蝸の音が濡らし始めた。

「駅からどれくらい？」

「十分かなあ。去年来たときはそんな感じだった。」

「ふーん。普通に距離あるんだよね。」

電車だけで済むんだからいい方だよ。

新しく出来た私立なんて、駅からさらにバスっていうのも珍しくはないって言うし。駅前に本屋があるのは良いな。

帰りにちょっと立ち寄ったりとかも出来るし。お決まりのハンバーカー屋とか、フライドチキンとかそういうのもある。

「一応、なんでも揃ってるんだね。」

見るとこは一緒だな。

「寄り道禁止なんだろうけど。」

「今時、そんな校則守る高校生いないよ、きっと。」

「そうだな。」

「ね、帰りに寄ってかない。」

「一応言っとくと、校則で禁止されてるけど。」

「いいじゃない。もう部活も引退してるし、櫟木も部長じゃないし。」

「ま、いっか。宮古も副部長じゃないし。」

制服でもないしな。

宮古の制服でもジャージでもない格好って、ずいぶん記憶にないな。

「あ、もうここじゃない。」

「うーん。」

こんなに住宅地の中だっけ。でもコレって、見た目校舎だし。

それ相応に賑やかだな。何処から入るんだっけ。

「あそこじゃない。人が出入りしてるみたいだし。」

そういえばそんな気がしてきた。一度来ただけだから、覚えてないんだよね。

ああ、しょぼい看板。“広野祭”か。ま、金かけないか、こんなのに。

「なんか、ドラムかなー、バンドの音みたいなのも聞こえる。」

「高校っぽいな。」

「広いねー。」

「なんだか、校舎でかいだろ。」

「みんな大人っぽいなー。私ら、迷子みたいだね。」

どこに行けばいいのかわからないという点では、迷子も同然だな。

中学にいるときは、上級生だからそんな顔でいるけど、こういう、年上の人ばかりいるところに混じると、自分が幼稚園児にでもなったような感じになってしまう。

「どこ行く？」

うーん。

「とりあえず、2-Fって所に行ってみる。姉ちゃんに来たぞって

顔見せとかないと。」

「そういえば、センパイとは2年ぐらい会ってないなあ。で、場所分かるの。」

「なんか3階とかいってたから。階段上がって順番に見てけば分かるんじゃない。」

「なんかねー、大人っぽい人とか、オッサンみたいな人もいるね。」

「お前、男ばっか見てるだろう。」

「だって、みんな、ちらちらこっち見るんだもん。」

まあ私服だしね。ちょっと目立ってんのかな。

「どうかした？」

「ちょっと、落ちつかないからつまんでいい？」

「うん。」

でも、そのひじのところつまむのって、へんじゃない？

まあ、気持ちが落ち着かないのは分かるよ。

たしかに、宮古はちらちら見られてるからね。

わ、うつむき加減だ。へえーそんなにシャイだっけ、宮古。

「あ、なーんだ。階段の直ぐそばなんだ。」

「ほんとだー。何やってるんだろ。」

「入ってみるか。」

お邪魔しまーす・・・いるかな姉ちゃん。



「ヨウ！」

えーあーうー、そんな大声で呼ばなくても聞こえるし。  
なんかハズカシ。えーと。

「来た。」

「ぷっ、何それ。“来た”とか。」  
弟をいじめるな。

「あ、グリの弟くん？」

「そうだよ。」

「えー、彼女連れてきたんだー、やるなー。」

「おねえちゃんは、彼氏いないのにね。」

「中3？、中2？」

「ちょーっと、関係ないでしょそんなの。千紗も久しぶり。」

「ご無沙汰です。」

「なんだ、姉公認か。つまないんだー。」

周り女ばっかだ。助けてー。

「部活の後輩なの。もう引退だけどね。」

「はい。」

「グリの弟くん。ウチ受けるんだって。」

「はい、そのつもりです。」

「だって、しっかりしてるー。こりゃ姉が自慢するはずだわ。」

「してないって！もう・・・。」

なんかすっごく、居心地悪くなってきた。つーか、恥ずかしい。

「うちも弟いるけど、うるさい、クサイ、バカでおわりだもん。

でもグリってば、うちの弟は頭いいし、性格いいし、女の子に  
もてるとか・・・。」

「行ってません。言っていないからね、ヨウ。」

「言ってる言ってる。男の話とかぜーんぜんしないのに、弟くんの話はしょっちゅうしてる  
よね。」

「もう、あとで刺すよ！」

「こりゃ来年が楽しみだ。」

「姉さん、ボクちょっと、折角だからどこか見に行きたいんだけど。」

「あ、うん。後で探しに行くから、千紗と一緒にまわっといで。

（ごめんね千紗、私の友達こんなのはっかで）」

「（いいえ、センパイ。変な人慣れてますから。）」

「ちょっとー、小声で言っても聞こえてるよー。どうせ、私はこんなですから、ふん。」  
早く逃げよーっと。

「何あの女。うるさい！」

「ごめんな千紗。無視されたみたいで、やだったろう。」

「きゃ、千紗だってー。」

しまった。雰囲気につられた。

「訂正。宮古。」

「だめ、千紗、千紗、千紗。」

まあ、いいか。そんなで機嫌直るんだったら。

「中庭あるんだ。すごーい。あれ、泳いでるの鯉？おっきい岩に、  
芝生でしょ。なんか、成金のオヤジの家みたいだね。」

見たこと無いから分かりません。

「髪、染めてる人もいるね。スカート丈結構短いな。割と自由なんだ。  
ふーん。」

「何見てるの文化祭で。」

「偵察。だって、ヨウは来年からここに通うわけだし。」

「調子に乗ってる？」

「あ、ねえお化け屋敷だ。入ろう入ろう！」

ごまかしたな。でも“ヨウ”は止めてくれないかな。“ヨウタ”だったら  
まだましだけど。

お化け屋敷なんつっても、ただ暗いだけで、・・・  
電灯振り回す顔塗りたくった人とか、・・・こんにくがゆれてたりとか、  
・・・なんかの効果音繰り返してかけてるのとか、・・・お化けの人形？  
これ人形なの？でっかいてるてる坊主？をつるしてあったり、・・・  
手がにゅーっと伸びてきたりとか、まあ、そんなもんじゃない。

「もういやだー。怖かったよう。もう絶対入らない。」

「なに言ってんの。」

「だって怖いんだもんお化けー。」

「千紗が入ろーって。」

「だって、こんなに怖いと思わなかったんだもん。」

「怖いか？あれが。」

「怖かったの！ああ、泣くかと思った。もう二度と入らない。」

大げさだよ。

「でも、まあ、いいか。一杯抱きついちゃったし。」

何が本音か分からん。

「のどかわいた。」

「喫茶店みたいなのは無いんだって。最近中毒とかよくあるし。」

「えー、じゃあどうしようか。」

「確か、食堂があってそこに自販機がおいてあるとか言ってたな。」

「センパイが？」

「うん。」

「ふーん、そうなんだ。」

あれ、なんかテンション下がった？

「何飲む？」

「カルピス。」

ぷっ、「コドモ。」

「何飲むの？」

「グレープソーダ。」

「そっちこそ。」

ぷはー。なんかようやく落ち着いてきたな。

「さっき、テニスコート見えた。階段のところの窓から。」

「へえー。」

「テニスするの。」

「どうかなー。」

「センパイは？」

「合唱。」

「そうなんだ。」

青空に薄い雲が流れてる。秋だなー。よくみたらトンボも一杯だ。

「みつけたー。」

「あれ、早かったね。」

「知り合いに聞きながら辿ってきたら直ぐ分かったよ。」

可愛い私服の女の子見なかった？ってきいたら。

ああ、半ベそで向うに行ったよって。千紗、泣いたんだ。」

どういう調べ方なのそれって。

「お化け屋敷怖かったんですよ。」

「ああいうの、雰囲気だからねー。チープでも怖いものは怖いよね。」

座っていい？」

「どうぞ。」

こら、落ちるだろ、そんな詰め方したら。

「千紗は、“水沢女子”受けるんだって？」

「あたし、ヨウみたいに頭よくないんで。」

「あれー、ヨウだって。でも、水女って人気あるよウチの男子にも。」

ウチの女子って結構生意気だから、水女の子みたいなのがいいんだろうね。」

制服かわいいし。」

よかったじゃない、ヨウ。」

なにがいいんだか意味わかんないけど。決めんなよな勝手に。」

「センパイ、彼氏いないって本とですか？」

「痛いところついてくるねー。」

「本となんだ。以外ー。いそうなのに。」

「ま、男友達と、彼氏ってちがうっしょ。」

文化祭見に来てする話かな。」

「体育館で演劇とかコンサートもやってるけど、見た？いかにも」

高校って感じでいいよ。」

「うーん、そういうのは来年にとっとく。今日はなんかもう、」

来るだけでお腹一杯。」

「慣れないところに来るとね、そうだよ。なにを見ればいいのか分からないし。」

千紗は？」

「駅前のドーナツ屋に心惹かれてます。」

「だって。ヨウお小遣い持ってる？出してあげようか。」

「大丈夫だよ。オレ、普段使わないし。」

「そう？後で泣き入っても知らないよ。」

「要らないって。」

「じゃあ、私はそろそろクラスに戻るかな。あのあと、うるさくってさ、本当に参ったよ。早々に退散したの正解だったね、キミたち。じゃあねー。」

制服着てる姉ちゃんて、あまり意識して見たことなかった。だから、今遠ざかっていく後姿を含めて、なにか新鮮というか、ちょっとどぎまぎする。

「センパイ、大人になったなー。」

「高校生だかな。」

「中学のときから、あこがれてたけど。なんか、負けてるなー。」

「比べる対象じゃないだろ。」

「そんなこと言ったって……。ヨウには分からないかもしれないけど……。ヨウには分からないんだよ。女の子の気持ち。」

そういうのが分かるほうの人間じゃないというのは、十分わかってる。

「姉さんと張り合うのに何か意味有るの？」

“負けてる”とか、意味無いと思うけどな。相手高校生だぞ。  
……ってというか、何の勝ち負け。

あ、ソーダのげっぷ出そう。

「ヨウが広野に行くのって、センパイが居るからでしょ。」

グボ。

宮古が変なこというから、げっぷがおかしな所に止まったじゃないか。  
気持ちわりー。

「ナニ馬鹿なことってんだ。そりゃあ、小さい頃からずっと面倒見てもらってきたけど、高校生になってまでそんなこと考えてないよ。」

わかんないなー。

「そうじゃなくてえ。一つ屋根の下で暮らしている上に、学校も一緒なんてことになったら、私が入り込む隙がないよ。」

「姉弟なんだから。」

「でも、血がつながってない姉弟なんて、ほんとの意味で“きょうだい”って  
いえない……。」

「えっ。今なんて？」

いま、血がつながってないっていったのか？

なんだそんなビックリした目をして。驚いてるのはこっちだぞ。  
なに言い出すんだ宮古。

「やだ、知らなかったの？」

「知らなかったのって……、オレと姉さんが血がつながってないって一体。」

「ご、ごめんなさい。わたし、とんでもないこと言っちゃった。」

なんなんだ。何の話だ。

「あ、まだ居た。よかった。

ヨウ。母さんに今日は帰りが遅くなるから夕飯手伝えないって  
言っといてくれる。」

この人が、ボクの姉ちゃんじゃない？

ずっとボクの面倒を見てくれた、姉ちゃんが、姉ちゃんじゃないなんて……。  
そんなこと。ありえるのか。

「ヨウ。どうしたの。千紗も真っ青な顔して。何かあった？」

「急に来んさって、びっくりした。」

「すみません。迷ってたもんで。」

「ナニを迷い込んだ。」

「来るには来たんですけど、もし家が見つからなかったら、

そのまま帰ろうと思っていました。

会うか、どうしようか、迷ってたんです。顔見て、どうするってわけでもないし。

自分が自分の親とは別の親が居るって知ったとき、一度は会わないといけないんじゃないかと思ったんですけど、そのときの気持ちだけで来てしまいました。

だから、何をしたいというのもなかったんです。

あ、そうだ。」

さっき、彼女と行き違ったときのショックで忘れてた。

「お土産は買って来たんです。いくらなんでも手ぶらはないだろうと思って。

これなんですけど。」

危ない危ない。でも、家が解らなかったらこれも持って帰ったのかな、この紙袋。

地元でこれ持ってうろうろしてたら、知り合いに変な目で見られそうだ。

「あら、ありがとう。遠慮なく頂戴します。」

ええ、もう。どうぞどうぞ。

「お母さんは元気してらっしゃる？」

「ええ、まあ。僕も仕事してるんで、もう辞めろって言ったんですけど、聞かなくて。」

「働いてらっしゃるの？」

「はい。事務の仕事を。家にいるより、働く方がいいって聞かないんです。

おかげでボクは姉に頭が上がりなくなりました。」

こんな話していいのかな。この人の前で、ウチの母親の話なんて。

「ここは、そういう働き口はねえからね。お姉さんいるの。そう。」

「何一んにもなくて、おどろいたでしょう」

そうだなあ。



「駅に着いたときは、そう思ったけど、今はそうでもないです。

何にもないどころか、彼女に会って、突然妹が増えてびっくりしましたよ。

こんなのばかりです。」

「こんなのばかりって？」

「オヤジの子じゃないって解ったのも、突然だったんです。それも、

親からじゃなくて、その、僕の友達からそういわれて初めて解ったっていう。」

「そーら、驚いたね。」

人生ひっくり返ったもんなー。

自転車の音だ。結構きついブレーキの音。がたがたと押して歩く音。

スタンドを立てる音。

「騒々しい。あん子はもう。」

あの年代ならそれが普通でしょう。

「いま、帰りましたー。 きんさつとる？」

くっくっく。

「これ！里美。」

来た来た。

「さっきはどうも。いそいでたし、突然やったもんで。 あ、お母さんこれ。」

びっくりしたろうな。

「はい。ちゃんとお相手しとってな。」

なんだろ。お茶菓子でも買って来てくれたのかな。

「はじめまして、櫛木 遙です。」

「ども。里美です。あの、・・・お兄さん、ですよ。」

「うん。びっくりした？」

「びっくりしたっていうか、一応お兄さんが居るって言うのは

聞かされてたから。だから、どういう人かはいろいろ想像してた。」

じゃあ、不意打ちはボクだけか。でも想定できないことではないな、  
こういうことは。

「あってみて、がっかりした？」  
そんなに首振らなくてもいいよ。

「なんか、大人っぽくっていい。私一人っ子だったから、兄弟居たら  
なーっておもってて、お兄さんに会いたいなーって思ってた。  
いま、何してるんですか。」  
最近の子は、みんな標準語なんだな。

「働いてるよ。普通に会社に勤めてる。」  
「へー。結婚とかは？」  
「まだけど。どうして？」  
「だってー。いきなり子供が居て、私がオバサンだったらいやだから。」  
「いまいくつだっけ。」  
「17才。」  
「高校生？」  
うん。

「この近くにあるの？」  
そうは見えないけどな。山と田んぼしか目に入らなかったし。

「米子の高校。」  
「遠いでしょ。ここからだ。」  
「うん。だから普段は寮に入ってる。いまは夏休みで帰ってるだけ。  
そうだ、みんなびっくりするだろうな、突然お兄さんが尋ねてきた  
とか言ったら。」  
嬉しそうだな。

「ひょっとして、東京？」  
「の近くだけど。」  
「やった。あのね、お願いがあるんだ。」

・・・早いな。ひょっとして何かたくらんでたのか。参ったな。  
でも、だんだん慣れてきた。本当の妹に思えてきた。

「お母さんにはまだ内緒にしてるんだけど、東京の大学受けてみたいの。

お兄さん泊めてくれないかな。」

「いつごろ？それ。」

「来年の冬。」

ああ、その頃だと落ち着いてるだろうな。

「まあ、ご両親とちゃんと話し合ってからだな。」

「大丈夫だよ、どうせ記念受験だし。あと浦安にも行きたいんだー。」

そっちが本命だな。

「友達も連れてっていい？」

おいおい。

「東京は危ないからダメだとかうるさくって。それにホテル代高いでしょ。

服も買ってみたいし、お店にも入りたいし。」

全部聞こえてんじゃないのか、キッチンのお母さんに。

「そっかあ。ヨウ、知っちゃったかあ・・・。」

「ごめなさい。・・・ワタシ、ウチの母さんが言ってたから  
知ってるものだと思ってた。」

「千紗が悪いんじゃないよ。黙ってた私の責任だから。ご近所の人が  
知ってるぐらいだから、いつヨウの耳に入ってもおかしくなかったのに、  
私が黙ってたからね。」

だめだ。まだ状況がよく飲み込めない。

姉ちゃんが本当の姉ちゃんじゃないなんて。じゃあ、父さん、母さんは？

「ヨウ。そんな顔しないで。

お姉ちゃんは、お姉ちゃんだから。血がつながってないとか、  
そんなことどうだっていいの。

お姉ちゃんはね、ヨウがお母さんに連れられてうちに来たときのこと、  
ちゃんと覚えてるんだよ。ちっちゃくて、かわいくて、新しいお母さんは  
嫌だったけど、ヨウは出会ったときから大好きだった。」

ということは、ボクは母さんの子供で、姉ちゃんはオヤジの子供  
だったってことか。

ボクとオヤジはつながってなかったんだ。

「ヨウごめん。ワタシ、ほんとに知らなくって。」

そうだよな。

「千紗は悪くないよ。ちょっとびっくりしただけだから。

いつかは知らないといけなかったのが、たまたま今日で。

それが千紗だったのはびっくりしたけど、でも、姉ちゃん以外  
だったら、千紗でよかったのかもしれない。姉ちゃんの次に  
付き合いが長いもんな。」

やっと声が出た。

一生喋れないかと思った。

「ほんとはぎゅっとして、やさしくしてあげたいところなんだけど、  
ここ、学校だからねー。」

「やめてよ、そんなハズイこと。」

「そんなことしてるんだ・・・。」

「してないって、千紗、よそで言うなよ。してないからな。」

「三年生ぐらいまでは、したかな。」

「嘘だ！してない。」

「ほんとだよー。」

姉ちゃん。カンベンしてよ。

「いまちょっと抜けてきただけなんだ。だから戻らないといけないんだけど。」

「うん。ボク、もう帰るから。」

「じゃあ、千紗。ヨウをよろしくね。」

「あ、はい。」

まだ少し混乱してるかな。

母さんはボクの母親で、父さんとは血がつながってない。母さんも父さんも再婚てことか。どういう事情があったんだろう。

じゃあ、ボクの父親ってほかにいるんだ。それともこの世にはもう居ないんだろうか。

それは、母さんに聞かないと解らないのかな。

いままでボクに何も言わなかったぐらいだから、聞かれたくないことなのかもしれない。

姉ちゃんの本当の母親は？

姉ちゃんは小さいときからそういうウチの事情を知ってて、そういうことをいろいろ考えながら成長してきたんだろうな。その上で、本当の弟のようにボクの面倒を見てくれてたのか。

参ったな、なんて人だ。

戸惑いって言うの、こういうのを言うんだろうな。

受け入れるのが難しいけど、受け入れないといけない事実があるってこと。

「ヨウ、ごめんね。」

ああ、黙り込んで歩いちゃったからな。

「千紗は、いいんだって。ウチの家族の問題だよ。」

「そうじゃないの。」

じゃないのって、だったらなんなの。

「そうじゃなくて、・・・ヨウがセンパイのこと好きだから、

広野に行くんだと思ったの。・・・おなじように。」

ワタシとおなじように、ってこと？

でも姉ちゃんが好きだからって、・・・そういう意味か。

血縁じゃないからってことか。

「千紗、大胆なこと考えるな。」

「だって、ヨウにワタシのことちゃんと見て欲しいんだもん。

離れ離れになる前に、幼馴染じゃなくて、女の子としてワタシのこと

見てほしい。」

「見てるよ。でも、学校で“ヨウ”は無しだぞ。オレも今まで通り

“宮古”って呼ぶから。」

「ええ、どうして一。」

どうしてって、そんなの恥ずかしいからに決まってるだろ。

「ドーナッツ食べる？」

「はぐらかした！ヨウの卑怯者。女の子がここまで言ってるのに。」

「食べないのか？」

「食べるけど・・・。」

考えたこともなかった。

そんなこと。

「こん子は、夢みたいなことばかりいいよるでね。」

「夢じゃなくて現実だよ。父さんも大学には行きなさいって  
言ってたじゃない。」

「それは、ちゃんと勉強してからの話。親元はなれて米子で何してるか、  
さっぱりわかりやせん。」

「兄さん。うちの母さん、娘のやる気をヘナすことばかりいうんだよ。」

「あーれ。兄さんとか。もうそんな馴れ馴れしい・・・。」

「だって、生まれたときからあってなかっただけで、ずーっと兄さん  
だったんだから。」

「はしゃぎすぎ。」

なんか、いい親子だな。母さんとこんなふうにしたことなかったな。

「まあ、受かる受からないは別にして、一度ぐらい東京に出てみても  
いいんじゃないですか。僕も出来るだけ面倒は見ますから。」

「ほーら、兄さんは、ウチの味方。」

おいおい。

なんだか、全然予定外の展開になってきたな。こんな親子喧嘩の間に  
挟まれるとは思わなかったよ。

「遙さん、困った顔してられるげな。」

「あ、ごめんなさい。つい、はしゃいでしまっ。

なんか兄さんに会えたのが嬉しくて。」

あ、ケイタイだ。

「すみません、ちょっと。」

縁側のほうにでも行くか。

「はい。」

“ヨウ。いま何処。”

「鳥取。父さんの家。」

“やっぱり。・・・無事ついたのね。”

「うん。まだ会ってないけど。」

“わかった。じゃあまた後で。”

「うん。」

なんか、急いでたみたいだな。っていうか、騒がしかった。

駅かな？姉さんにも黙ってたからな。ちょっと怒ってるかもしれない。

「姉からでした。」

「そう。なんていってらした。」

「いや、特には。」

「お姉さんかぁ。でも私には関係ない人なんだよね。」

そうだね。

「お刺身用意したから、今夜は泊まっていきなさい。ここは

旅館もないし、ここまでディーゼルできて、また米子まではきついよ。

着替えはもってきんさったでしょう。」

うーん。そのつもりじゃなかったんだけど。

「ねえ、泊まろうよう。今度いつあえるか分からないんだよ。

もっと話したいよ。」

夏休み、そんなに退屈だったのか？

「宿題とかあるの？みてあげようか。」

「えー嫌だー。」

「見てもらえばいいでしょ。」

「やだよー。だって、真っ白なんだよ。恥ずかしいよ。」

ばれてるじゃない。

ヒグラシの声に混ざって、遠くのほうから、からからというバイクの音が聞こえてきた。



「母さん。聞きたいことがあるんだけど。」

あれから一週間ぐらいたったかな。

夕食が終わって、キッチンで洗い物してる母親の後ろから話しかけた。

水がザーッと流れ出る音だけがして、

「これ、片付けちゃってからでいい？」って、振り向きもせずに母さんは言った。

「うん。部屋にいるから。」

十五年知らなくて、いまこの十分ぐらい待たされても、  
まあたいしたことではないよ。

問題集開いたけど、字が頭に入っていないな。

「ヨウ。」

なんだ姉さんか。髪の毛が濡れてる。風呂上りだな。

「わたし、部屋にいるから。」

もう。

「姉ちゃん、それ過保護だよ。」

まだ、何か言い足りないそうだったけど、姉さんは入り口から離れて  
隣に入って行った。ドアを閉める音はしなかった。

ああ、もう問題集は放棄だな。

階段を上がってくる母さんの足音がした。オヤジはまだ、この時間には  
帰っていない。いつも遅くまでトラックを運転している。

改めてみると、母さん、年取ったなって思った。おばあちゃん子とか  
よく聴くけど、そういう言い方をすると僕はお姉ちゃん子だ。

仕事で家にいるのは夜だけみたいな母さんより、姉さんの方が  
僕のことをよく知ってるはずだ。

乱れた前髪をかき上げてるこの人が、これから何を言おうと  
僕は大丈夫な気がした。

なさないけど、姉さんの「わたし、部屋にいるから。」って言葉が、  
僕を勇気付けた。

「僕の本当の父親ってどういう人。」

母さんは口から息を吸って、吐き出した。

「まず、事実だけを話すわね。」

こういうところ、普通のおばさんとは違うところなんだろうな。

「鳥取って知ってる？そこの御厨っていう小さな町に住んでる。」

じゃあ、生きてて、離婚したのか。

「遙が生まれて、直ぐに離婚したの。」

「どうして。」

ふうー……か、長い息だな。

「田舎って言うところが、よくわかってなかったの。何もなくて、

働くことも出来なくて、それでも我慢してたんだけど、遙を

お腹の中に授かって、向うじゃ産科もないからこっちで

生むことにして、そうしたら、もう御厨に帰ることが出来なかった。」

うっ、どういう理由なんだか、よくわかんね。

「じゃあ、どうして結婚したの。」

「あなたのお父さんが学生するとき、こっちの大学にいたの。頭よくて、

素朴で、母さんみたいな性格と合うんじゃないかとか、まあでも、

その辺りの本当の理由ってよくわからない。

田舎に帰って高校の先生になるって聞いたときも、ついてきてくれって  
言われたときも、なんとかなるって思ってた。

でも、何もすることがなかったのね。素朴さって、何もないところだと  
単に退屈なだけ。若いときは、そんなこと気づかなかったの。」

「オヤジと結婚したのは？」

「電話と手紙のやり取りだけで離婚して、暫らくした頃かな。お節介な人が  
紹介してくれたのよ。幼い子供を抱えて、奥さんを必要としてる男の人が  
いるってね。

で、会ってみて、あなたの父さんとまるで正反対な人が現れて、なんだか  
おかしくなっちゃって、この人でもいいかなって。それから十五年。

案外うまく行ってるでしょ。」

「恋愛したわけじゃないんだ。」

「お互いバツイチだから。恋愛感情より、上手くやっていけるかって言う方が大事だった。案外似合いの夫婦じゃない、父さんと母さん。」  
わからん。

「じゃあ、姉ちゃんのお母さんは。」  
隣の部屋見た。気をつかってるのかな。

「亡くなったんですって。」  
そうか。

「他には？」  
悪いと思ってる？その、父さんて人に。

「いや、いいや。大体わかったから。これ以上きいても、何が変わるというわけじゃないし。」  
「そう。」

もっと、いいわけとか、父さんて人を悪く言ったりとかしたらどうしようかと思ったけど、なんだかお仕着せの服でも着せられたぐらいに、淡白だったな。

「あなたは、いままで通りでいいのよ。」

わかったよ。・・・そうだ。  
「どうして、今で言ってくれなかったの？」

今日初めて考え込んだ。

「子供には、ショックが大きいから、かな。」  
かな？って、なんだそりゃ。確かに、ショックは大きかったけど。

「母さん、わたしから話すよ。」

「兄さん。 帰ってきたよ。」

そうらしいね。

「緊張する？」

「からかうなよ。」

でも、その通りだ。唾液が出なくなってきた。

唾液でないし、喉がかさかさしてくるし。

「夕餉の支度、してくるから。」

逃げた。逃げるかな、おばさん。

里美ちゃん。目が笑ってる。

足音だ。こんなに静かだと、足音が聞こえるんだ。

大きそうな足音だな。

“ん。お客さんかあ？”

ただいまとか、いわないのか、父さん。母さんが無口だって  
言ってたけど、本当だな。

いま、靴脱いでる。

かなり、どきどきしてきた。さっき家に来たときの比じゃないな、  
これは。

里美ちゃん、笑いすぎだろそれ。

なんていう。なんていえばいいんだ。始めましてか、やっぱり。

・・・でも親だぞ。

ああ・・・もうだめかも。

ぎしっ、ぎしって。なんて最悪な音なんだ。

来た！とりあえず立とう。

「なんだ、遙か。」

・・・！！？

「そんな。突っ立ってないで座れ。」

なんだ、遙かって・・・なんで解ったの？

「つまんなーい。つまんない、つまんない。

お父さん、なんだ遙かって、なによ。何十年ぶりかで始めて

会ったのに、“なんだ”って何よ。」

「そうか？」

「感動しないじゃない。」

「どうしてお前が感動するんだ。」

“あーっはっはっ・・・。”って、奥の方で、おばさんひどいな、逃げてったくせに。

「始めまして。遙です。」

「知ってる。」

愛想ねー。

「あの、どうして？」

「お前の母さんが、時々写真送ってきたからな。入学とか卒業とか。」

「えー、そんなの有ったんだ。全然知らなかったよ、お父さんずるーい。」

「なんで、お前がそんなこというんだ。」

「だって、私の実のお兄さんじゃない。お父さんの息子ってだけじゃないんだからね。」

「あ。そうか。」

“あーっはっはっ・・・。” また、笑ってる。

ああ、なんだか解ってきたよ。この人じゃ、母さんのダンナはダメだ。成り立たないよ、きっとこんな逃げ場の無いところじゃ。

「まあ、よくきた。今夜は泊まっていきなさい。母さんお爛つけて。」

“ビールじゃないんですか。”

「あー。 両方だな。飲めるんだろ。」

「はい。」

なんか、どんどん拍子抜けしていく。っていうか、落ち着いてきたら、ようやくこの人のこと冷静に見れるようになってきた。

顔すら、知らなかったからな。

他人から見ればどうかは解らないけど、僕とは余り似てないんじゃないかな。人気の少ないこの町ですれ違ってても、これじゃわからなかっただろうな。

「はい、じゃ、まずビール。」

「兄さんのは私がついだげる。」

「ああ、ありがとう。」

なんだか危なっかしいぞ。はは、泡がおおいな。まあ、初々しくていいけど。おーやばやば。こぼれるぞ。

「あー、ドキドキした。こぼれるかと思った。」

じゃあ、父さんのは僕がつごう。それ、貸して里美ちゃん。

「どうぞ。」

「ん。」

愛想ねーなー。

「お母さん、わたしジュース。」

賑やかだな。里美ちゃんが居てくれてよかった。

「じゃあ、かんぱーい。」

なに乾杯なんだかよくわからないけど、この家で初めてこの4人が揃って、グラスをカチカチ言わせてるって思うと、乾杯してもいいかなって思える。

「こっちに料理持ってきてみましょうかね。お父さん動くの大儀でしょ。」

「お父さんそれより、お風呂入って着替えたら。いつものことだけど泥だらけだよ。」

「そうか。」

確かに、そんな感じだ。

「・・・せっかくー。」

「兄さんの相手は私がしてるから、さっと汗だけ流して着替えてくればいいじゃない。」

「そうか？」

そうしてください。

「じゃ、・・・どっこらしよっと。」

「里美ちゃんには、頭上がらないんだ。」

「年取ってからの子供だかね。可愛くてしかたねいらしい。」

そうなんだろうな。

「はい、ビール。」

「気が効くねー」

「へへー。こういうの一度してみたかったの。」

下手すると、父さんが出てくるまでに酔っ払いそうだな。

「お父さんにはしないの？ 普段。」

「しないしない。テーブルに置いとけば、自分で勝手について  
飲んでるもの。うちのお父さん地味だよ。飲んでも全然変わらないし。」

「里美ちゃんが寮に戻ったら、家の中寂しくなるんだろうな。」

「居ったら居ったでうるさいし。いんときゃいんで、しんとなるし。」

「まあでも、この町全部がそんな感じだけどね。」

だってさ。里美ちゃん。

「ワタシも、この家出るときは結構寂しいよ。寮だと畳の上で

ごろごろ出来ないし、好きなときにつまみ食いなんてのも出来ないし。

寮って何かと不便だからね。

でも、歩いていけるところに、コンビニがあるのはいいかなあ。

コンビニに有る？」

「もう、腐るくらい。」

「いいなあ。」

いやあ、キミはなかなか遅いさ。

長女だからかな。

どうして姉さんが。

「私がね、ヨウに言っちゃダメって言ったの。だから母さんも父さんも、ヨウにはいわなかったんだよ。」

「お父さんとね、いつか伝えないといけないとは話してたんだけど、和佳が……。ずっとヨウの面倒見てくれてる和佳にそういわれちゃうと、なんだか話しづらくて。うちでは、和佳が一番しっかりしてるからね。」

姉さんが一番しっかりしてるって言うのは解るけど。

親が言いなりって言うのはどうなのかな。

「おかあさん。後は私が話すから、もういいよ。仕事で疲れてるでしょ。」

こうやって、二人並んでいるのをみていると全然似てないって言うのがよくわかる。今までは見比べることもなかったんだけど。

身長も姉さんの方が高いんだ。

僕の中で、ゆっくりとこの家の風景が変わり始めてる。

当たり前のように見えてた柱の傷や天井の模様なんかが、妙によそよそしく感じる。

アルバムの写真、ビデオ、僕の頭の中にある思いでの風景。

そういうものの全てが、僕の心から遠ざかっていく。あれは本当じゃなくて、お芝居の中の家族だったんだ。

僕は全く別の景色の中で暮らしていたのかもしれない。そこはどんなところなんだろうか。

さっき、母さんは耐え切れないほどの田舎って言ってたけど、僕にとってもそうなんだろうか。

僕は一度もそれを見ないまま、生きていくんだらうか。

でも、見たからって言って、何か意味があるのかな。今はまだわかんないな。

母さんは何か言おうとしたようだけど、結局、ゆっくりと階段を下りて行った。

ひょっとして、姉さんと母さんて、「仲良く無いの？」。



「うーん、まあ仲良しっていうんじゃないかも。私のお母さんが死んで、お父さんを取られちゃって、仲良くしろっていう方が無理じゃない。大人の付き合いだよな。」

姉さん一体いくつだよ。

「私、一人ぼっちになったような気がした。さっき母さんが言ってたけど、あの二人、結構馬が合うみたいなんだ。ヨウにはね、そんな気持ち味合わせたくなかったし。」

だから、ヨウがある程度大きくなって、もう大丈夫っていうぐらいになるまでは、本当のことは言わないでおこうと思ったの。」

「それいくつぐらい。」

「うーん三年のときかな。」

「じゃあ、僕が中学に入るときか。そういうタイミングで、本当はねって、いかにもありそうだな。」

「違う。小学校三年の時。」

この人はもう・・・。

「ヨウが寂しくなかったら、私も寂しくない。ヨウのこと、ときどきハグしたのって、私自身の寂しさを紛らわすためもあったんだろうな。でも、そのときに、一瞬でも私のことを本当の姉じゃないなんて、思われたくなかった。」

「姉ちゃんから、寂しいって言葉、聞くとは思わなかった。」

「バーカ。 姉ちゃんは繊細なんだぞ。」

濡れた髪が冷たいぞ。ああ、でもリンスのいい匂いだ。思い出した。

この頬の感触懐かしい。

母さんより懐かしい。

「こういうの。もう出来ないんだ・・・。」

そうだな。僕と姉ちゃん。姉弟って言っても、血がつながってないもんな。

それより、

「いつまでも、姉にハグしてもらおう弟って言うのも情けないよ。」

ずっと、守ってもらってばかりだった。姉さんが悩んだぶん。  
僕は何も考えずにすんだ。

「いま、なんか、ちょっとホッとしてる。」

「何を？」

「何っていいのか、うまく言えないけど。これで良かったんだって  
気がしてる。」

「偉いね。いろんなことをちゃんと受け入れられて。ヨウは偉いよ。」

そうじゃないんだ。

そういうことじゃなくって、これからは僕が姉ちゃんを守るよって、  
そういう理由が出来たってことが、良かったって思ってるんだ。

なかなか言い出せないな。

面と向かってしまうと、なかなか言い出せない。

この先。この人は、ここから動く気はないんだろう。だったら、もう二度と会わないかもしれない。

そう考えると、今日言わないと、二度といえないかもしれない。とは、解っているんだけど、なかなかいえないもんだ。

最近はおヤジにもそういう呼び方をしてないし。

・・・年取ったよなあの人。口には出さないけど、いろいろ気を使ってくれて、いい人なんだよ。気い悪くしてないかな。母さん、今日のこと、内緒にしといてくれたらいいんだけど。

「ここは何にもないところだけど、魚は美味しいっから。どんどん食べんさい。」

「もう、いっぱい頂いてます。」

「じゃ、ビール。あ、お酒にしようか。母さん、お酒お酒。

せっかく私が買って来たんだから、じゃんじゃん飲んでね。」  
やばいぞ、高校生に潰される。

「お待ちどうさま。」

「貸して貸して。・・・はい、おひとつどうぞ。」

なかなか堂に入ってるな。

「そんなの、何処で覚えたの。なんか、いま、・・・とうさん睨まなかった？」

「いや、む。」

どさくさにまぎれて言っちゃった。アブねー。かまないでよかったー。  
まあ、お酒で顔赤くなってるし、ばれないだろう。

ん、「里美ちゃん？」

目、うるうるしてるぞ。

「里美“ちゃん”じゃなくて、里美。」

「調子に乗るな。」

「兄さん、飲みが足りないんじゃないの。はいもう一杯。」

「オレを潰すきか！」

「いいじゃない。酔っばらったらその辺に寝転べばいいんだし。」

「ちょっと、それ貸せ。父さんどういう育て方してるんだよ。なんかすっごい  
生意気だよこいつ。」

ま、一杯どうぞ。

「いや、まあ、な。」

無愛想な人だけど、顔見るとそればかりじゃないんだって、  
だんだん解ってきた。

「里美が東京来るんだったら、オレ、面倒見てもいいよ。」

ま、ウチは東京近郊って言うだけで、東京そのものって言うわけ  
じゃないけどね。

「受かったらの話だ。」

「よっしゃー！私、頑張る。」

「受かったら、だ。」

本とは出すの嫌なんだろうな。でも、里美ちゃんの人生だからな。  
里美が選ぶべきだ。

「だったら、もう一人ぐらい生んどきゃよかったね。」

ぶ————っ。

おばさん、それストレートすぎ。

「お母さん、やめてよね。私恥ずかしいよ。」

「子供が出来たら、・・・孫が出来たらつれて帰ってきますよ。ちょっと  
遠いけど、ここって、故郷だって言うのにちょうどいい風景じゃないですか。」

「兄さん、結婚まだだって？」

目、まんまる。

「いや、これからするんだ。だから、来た。結婚する前に、ちゃんと  
しときたかったんだ。」

「そら、目出度いことねー。」

「すまんかったな、なんもしてやれんで。」

「なに言ってるの。こんないい故郷残してくれて。それで十分だよ。」

里美、まあた、うるうるしてる。いいやつだな。きっといい、父さんと

母さんなんだ。

「一杯飲んでみる？」

「こら！」

“もしもし、あたしい。”

「ん。何？」

“大学受かったんだって。おめでとう。ちゃんと知らせてよね。

電話かけずらいじゃない。”

「サンキュー。ちょっと開放感に浸ってた。もう、ぜって一勉強しない。」

“だめだよ。大学行ったらちゃんと勉強するんだよ。”

「久しぶりにテニスするか？仕事始まったら、休みも付き合いとかで、

出かけたりするらしいじゃない。」

“らしいねー。グループ交際みたいでハズイ、っちゅーの。で、いつ行く？”

「明後日、どう？」

“いいよ。”

「じゃ、場所取れたらまた連絡する。」

“うん。”

「千紗の銀行ってどこだっけ。」

“栗田信金。”

「オレ、金預けにいこうっかなー。」

“私が店頭に出る頃には、東京でしょ。でも、まあ、来たら

笑うだろうな。”

「一応客ですが。」

“まあね、五千円でも客は客。それより、合格祝い、何がいい？”

「お、それ就職祝いの催促？」

“ちーがーう。純粋な気持ちだよ。幼馴染で、もとカレのヨウが

大学受かったのが嬉しいの。”

「そこまで細かく言うか、ふつう。」

“だって、まだ傷は癒えてないですよーだ。”

「千紗の感が鋭すぎるんだよ。自分でも知らなかったのに。」

“だよねー。でもね、十八年もそばにいたら解るって。

・・・ねえ、コクった？”

「・・・。」

“だめだなー、ヨウは。根性なし。”

「どうしてそっちだと思う！」

“十八年も付き合いってたらねー。ヨウは東京行っちゃうし、

離れ離れになって・・・誰かにさらわれるぞ。”

「そのときは、しょうがないんじゃない。」

“私は待たないよー。でも、ちょっとは期待しようかな。5年もしたらいい女になってるよー。とかいってるけど、広野の女に負けるとは思って無かったわ。”

「オレは一生独身でいるから、いい。」

“こだわってる？お母さんのこと。”

「うん。・・・千紗だから言うけど、男と女ってなんなんだろうって思うよ。千紗はずっと友達づきあいしてくれるけど、ツレの話とか聞くとそうじゃないじゃない。別れたら終わりだって。そういうの嫌なんだ。別れてて終わりになるぐらいだったら、付き合えなくていいよ。」

“ヨウと私って、特別なんだと思うよ。だんだん道は分かれ始めてる気がするけど、でも、ずっと一緒に歩いてきたでしょ。ヨウじゃない他のオトコだったら、私もそうだと思うな。ヨウとは、この先もずっと切れなくていい。”

「うん。それはオレも同じ。」

“単なるきれい事って言った子もいるけど、それでもいいんだあ。

そのきれい事を貫くのも、格好いいと思うんだよね。かっこよさって、ちょっとやせ我慢するみたいなところあるでしょ。”

「貫きますか。」

“見せましょう。・・・でも、やっぱりちょっとは期待させる。”

「はいはい。」

夜。

十二時になる前に、父さんとおばさんは眠ってしまった。

二十数年ぶりの、初対面の息子を前にして、夜通し飲んで語り合うなんて言うのを想像した僕は、かなり肩すかしを食らった気分だ。オヤジだったら、きっとそうしたらろうな。

「パジャマ持ってきてたんだね。」

「ホテルの浴衣とかパジャマって嫌いなんだよ。気持ちいいのに出会ったためしが無いからね。」

なんていう虫だろう。一体何種類の虫が鳴いてるんだろう。全部で何匹ぐらい鳴いてるのかな。風情と言うより、うるさいに近いぞ。この辺りの草を全部刈り取れば分かるかも知れないけど、例えそうだとしても絶対にみたくない光景だ。

「やっぱり、東京に行きたい？」

「うん。行けるものなら行ってみたい。

私もそれなりの年だし。かわいい服着て雑誌に載ってるようなところ、歩いてみたいし。」

まあ、そうなんだろうな。そんなので一杯なんだろうな、あの辺りって。

「父さん母さんには悪いけど、ここにいたら、もうこの先の人生ってぜーんぶ見えちゃう。

高校出て勤めるっていても、農協か、かまぼこ工場か、そんなところぐらいしかないし。二十ぐらいで地元のさえない若いのと結婚して、子供二三人産んで、畑仕事か網の手入れか何かで年取って、ダンナに先立たれて、あとは日がな一日ぼーっとして、ある日ころっと逝っちゃうってというのが見えちゃうんだ。」

この子やっぱり、しっかりしてるな。僕なんかより数倍しっかりしてる。

「なまじ成績良いとね、大学行くんだらうって廻りが思うの。

変でしょ、自分より先に廻りがそういう目で見ると。

それで、地方の大学行っても、女子の就職なんて無いよー。」



「だから東京？」

「うん。まだここよりは可能性がある。

別に、京都とかでも良いんだけど。親も近いからそっちが良いんだろうね。でも、折角兄さんが東京にいるんだし。やっぱ東京かなーって。」

「東京まで行くと、そう簡単には帰れないもんな。」

「へへー。そうなんだよー。」

「そんなにいいところじゃないっていうのは、覚悟しとけな。

何でも高いし、人は冷たいし。金さえあればあんなに楽しい都市は他にないかも知れないけど。そうじゃなかったらしんどいだけだぞ。」

「だから兄さん、よろしくね。」

こんなふうに、身内に頼られるようになるとは思わなかったよ。でも、良いもんだな。

「星、綺麗だな。」

「いいところでしょ。だから時々帰ってきてね。」

えー、また、9時間も電車乗るのか……。きついなー。

「サラリーマンはきついんだよ。」

「あー、こらー、可愛い妹の顔、みたくないのかー。」

ははっ。そうだな。今日、ほんと来て良かったよ。

「さてと、オレもそろそろ寝るかな。なんか、疲れたって言うか、気が抜けたって言うか。」

「ええー、もうちょっと話そうよー。わたし全然眠くないし、眠りたくないよ。・・・そうだ、コーヒー入れたげようか、インスタントだけど。」

こいつ、しょうがないな。千紗みたいなタイプだな。

「わかったよ。じゃあ、そのコーヒーよろしく。」

あーあ。妹っていいもんだ。

昨日の夜は、結局3時ごろまで付き合わされて、少し眠ったところで開けた窓から、なんだか生活の音が聞こえてきた。体はそんなに眠ったつもりじゃないのに、もう朝なのかと思って外をみても、まだ暗い。

田舎の朝が、夜明け前から始まるってことを初めて実感した。こういうところで暮らし始めたら、体が健康になりすぎて怖いな。

そのあとまたうとうとしたけれど、緊張してるのか、余り眠れた気がしない。静か過ぎてかえって落ち着かなかったな。

そうしてるうちに朝がきて、あまりぐずぐずしてると思われたくもないので、フトンから出た。睡眠時間削るのは、サラリーマンの常識。

白いご飯の朝飯なんて記憶に無いな。小学校の修学旅行の旅館で食べて以来かもしれない。

「パン買っとけば良かったかね。」

「いえ、全然。」

「今日はゆっくりしていなさるの？」

「それが、昼ごろには発たないと今日中に帰れなくなるので、そうしようかなと思ってます。」

「あわただしいね。もっとゆっくりと来なさればいいのに。」

「休みがもっとあればよかったですけど。」

まあ、昨日の今頃は、とてもそんなのんびりする気分じゃなかったし。

「男は忙しいんだ。」

おっと、僕もびっくりしたけど、おばさんもっとびっくりしてる。

「おはよう。」

「あら、めずらしー。今日は早起きだねえ。」

「そんなこと無いもん。」

「髪の毛までといて。」

「いつもちゃんとしてるもん。」

「目の下、くま出来てるぞ。」

「うそ！」

「嘘だよ。」

「兄さん、ひどい。妹いじめだ。」

「静かに食べなさい。」

こら、舌出すな。はしたない。

まあ、家族みたいな雰囲気なんだけど。

居心地いいんだけど。

こうして左手に持っている茶碗や、お箸って客用のなんだよね。だから、この家からすれば、僕はひと時の客人だっていうことなんだよ。

里美ちゃんが、僕のほうをちらちらみて、クスって笑ってても。

おばさんがおかわりどうって、手を出してくれても。今日の楽しい朝食の雰囲気って、本当の家族のものじゃない。

僕と言う突然の客のための、仮の家族の姿なんだ。

居心地はいいけど、これがずっと続くものだなんて思っちゃいけない。

だから、僕はやっぱり今日帰ろう。

「お父さん、今日は発掘行くの。」

「ん。今日は休みだ。」

ほうほうほうって、里美ちゃん、本と面白いなキミは。

「宿題は。」

「大丈夫大丈夫。父さんに見てもらおうようなことにはならないから。」

会話続かないね。とうさん。

「どっか、案内してやれ。」

自分でしないのかよ。しょうがないひとだな。

・・・されても困るけどね、僕も。

「んじゃ、海行く？」

「ああ、いいな。ウチの近くには無いし。」

「じゃあ、五分後に玄関に集合！」

五分！ 短すぎないか。野生か、里美。

ホテルで待ち合わせとか、変に思わなかったかな。

正月に帰ってから3ヶ月逢ってない、・・・のは最近では珍しくも無いかな。大学からずっとこっちに居ついちゃったからな。帰りにくいんだよな、あの家。

「ヨウ。お待たせ。」

「ごめん、呼び出したりなんかして。」

「珍しいから何事って思ったけど。」

めかしこんでるな。気づかれたのかな。でも、そんなはずは無いぞ。

“いらっしゃいませ。おきまりでしょうか。”

「わたし、ミルクティ。」

“かしこまりました。”

「もうちょっと、家の方にも顔出しなさい。全然遠くじゃないんだから。お母さん寂しがってるわよ。」  
その母さんから電話があったんだけどね。

「仕事忙しいからって、休みの日はあるんでしょう。休みはデートで忙しい？」  
なんか、たまってる姉さん。

「やあね。ニヤニヤして。なんとかいいなさいよ。」  
ずっと母親代わりで、もう染み付いちゃってるよね、姉さん。  
ま、昨日の電話は、本当の母親がした唯一の親らしいことになるのかな。

「・・・で、下宿でもなくて、ホテルなんて。・・・ヨウ一人なの？」  
はあ？

「一人って・・・どうしてさ。」

「わたし、てっきり、姉さんこの人を紹介します。姉さんの妹になる人ですって、引き合わされるのかと思ってた。」

「だから、めかしこんできたの。」

「めかしこむって・・・。そうよ。なめられないように、精一杯着飾ってきたの。」

悪かったわね、ふん！」

くっくっく……。

「違うよ。そんなの居ないよ。」

くっくっく……。

「笑ってるけど。笑ってる場合じゃないでしょ。その年で、姉に紹介する彼女も居ないんじゃない。千紗なんか、もう二人も子供いるっていうのに。」  
年子だったよな、たしか。

「じゃあ姉さんはどうなの。」

「私はもてるけど、お断りしてるの。弟がちゃんと身を固めるまでは、嫁にはいけません。あなたの面倒見てくれる人。千紗だったら絶対だったのに。ずっと付き合ってたでしょ。なのになんで？」  
だから、母さんが電話して来るんだよ。

「千紗とは、いままでもこれからもいい友達。」

「ふ——。また眉間にしわが増えるわ。」  
これからもっと増えるかもしれないね。

「あのさ、そろそろ、僕が話していいかな。」

海辺だからか、風がある。

縁側に座って、こうしてるだけで汗が引いていく。

11時ぐらいかな。

「時計見るの、止めようよ。」

「ごめんごめん。」

「ごめんは一回。」

不機嫌だな。

「こうやってると、不思議だな。この家で育ってたら、オレってどんな風に育ってたんだろ。こういう、山や海が近くにあって、空がでっかいところで暮らしてたら。

そんなこと考えてると、すごく不思議な気分になる。」

風鈴の音か。

「だったら、わたし生まれてないよ。」

そっか。

なんだか、あの空の高いところにある、刷毛で描いたような雲の気持ちがわかる気がする。

「オレさ。・・・母さんが離婚したのを長い間知らなくて育て、だから、何でなのかって言うのも聞けなくて。

結婚とかしないかな、って思ったこともあるんだよ。

でも、今気づいたけど、里美がオレの妹に生まれてくるためだっていうんだったら、すごく納得できる。」

「兄さんて、結構ロマンティスト？」

「からかうなよ。本気でそう思ったんだから。」

「兄さんがこういう人でよかった。」

人間て、やっぱ足を踏み出して、ドアを開けないとダメだな。

いつも、今日みたいにいい方向に転がるとは限らないだろうけど、立ち止まって躊躇してるだけじゃダメだ・・・て、この間もそう思った

ばっかりなのに。

本としようがないなオレ。

「父さんもさ、ずいぶん嬉しそうだし。」

「あれで？」

「そう。あれで。普段、あんなに話さないし。今日だって発掘休んで家に居るし。嬉しそうだなって思う。」

なんかしゃべってたかなあ。

「とてもそんなふうには見えなかったけどな。もうちょっと驚くとか、感激するとか。」

「わたしから見ると、随分陽気に見えたよ。爛つけろ、とか。」

そういうことにしとくかな。

「生意気いうようだけど、父さんずっと兄さんに会いたかったんだと思う。

一日家を空けたりする、なんてことが殆ど無いような人だから、

私や母さんに黙って、こっそり会いに行くなんてことも出来なかっただろうし。」

そうだな。

僕だけじゃなくて、みんななにか少しだけ我慢して、そしてここにいるってことなんだな。

「だから、ありがとう兄さん。」

くそ、泣かせること言いやがって。頭くしゃくしゃにしてやる。

“ごめんください。”

「あれ、誰だろ。この近所でごめんくださいなんていう人いないよ。」

なんで・・・。

“ごめんくださーい。”

まじかよ・・・。

“はーい。”



あー、この後のこと想像すると、ちょっと、・・・  
これから一体何が始まるのか、あああ・・・想像も出来ない。  
想像するのを嫌がってる。僕の頭が。・・・困ったな。

“どちらさまで。”

おばさん、その人は。

“こちらに榎木 遙がお世話になっていませんか。”

“はあ、いらっしやいますよ、昨日から。なら、ひょっとして・・・。”

“遙の姉で、和佳と申します。”

「ええー！」

声でかいよ、まる聞こえだよ、耳つぶれるよ里美ちゃん。

”おとうさん！おとうさん！遙さんのおねーさんが来んなさった。”

おばさん、そんなにあわてて走らなくても。

「え、誰だって。 遙の姉さん！あ、上がっていただけ。里美、里美！」  
なんだよ、僕のときとえらくリアクション違うだろ、それ。

「はい！なに！」

「あれだ、あれ。あれ用意しろ。」

そんなで分かるのか。しゃーないな。時間稼ぎするか。

「いらっしやい。姉さん。」

そんな玄関につたって、笑ってないで。

「ばかヨウ。黙って行ったらダメじゃないの！」

いやー、きつくないきなり。

「まあ、いろいろあって。・・・踏ん切りつかなくて。」

「分かってる。だからわたしが苦労するの。でも、この様子だったら、  
歓迎していただいたみたいね。」

「とりあえず、上がったら。」

「いいの？勝手にそんなこと言って。」

そうだな。

「里美一、上がってもらっていいかー。」

ひと呼吸。

“はい、お兄ちゃん。どうぞー。”

「お兄ちゃん？ ヨウが？ お兄ちゃんだなんて。」

姉さんそこ笑うところじゃないし。

奥に入ったら、座卓の向こう側に、こけしみたいに三人が並んで座ってた。

こういう場合、僕はそっちに座っちゃダメなんだよな。座布団も二つ、こっちにおいてあるし。

「遠いところ、わざわざお越しください。」

「突然申し訳ありません。弟が何にも言わずに来てしまったので。」

一応立場から言うと、僕が紹介すべきだろうな。

「えーと、お父さんと、この家のお母さんと、里美ちゃん。」

こんなでいいかな。

「始めまして。遙の姉の和佳です。」

「遙が随分お世話になったそうで、と、以前手紙に・・・遙の母親から。」

父さんそんなことまで知ってたのか。ひとつ言も言わなかったじゃないか昨日は。

「お世話だなんて。わたし達はずっと姉弟として暮らしてきましたから。」

「ええ、そうなんでしょうが。昨日から遙をみてて思ったんです。

よく育てくれたなど。

親らしいことは何もしてやれなかったけれど、わたしも教師なんかをしていますから。子供を見る目は確かなつもりなんです。

みんな、あなたのお陰だ。」

その通りだよ、とうさん。見るとこちゃんと見てるんじゃない。

ところで、

「こんな時間に良くこれだね。何時の特急で来たの。」

「特急？羽田から米子まで飛行機よ。もちろん始発に乗って東京に

出ただけだね。米子からは一時間ぐらいかな。全部で3時間ぐらい？」

「僕なんか9時間以上かかったんだよ！」

「ありえないわ。」

そーか、飛行機ね。

十五のときの発想には無かったなー。

「で、どうして姉さんが来たの。黙ってきたって言うけど、こっそり家出したわけでもないし。さすがにこの年なら、一人で帰れるけど。」

あきれてる。何故だ。

「ヨウは、どうしてお父様に合いに来たの？」

「それは、・・・そういうこと？」

「あたりまえでしょ！」

うーん。ちょっと意味が違うような気がしないでもないけど。でも、そうだな。言っておかないとな。

これを聞いたら、さすがの父さんでもびっくりするだろう。

深呼吸。は――――。

よし！

「姉さん。いままでいろいろ面倒見てもらってありがとう。

ほんと感謝してる。」

「こらこら、いまさら何。改まっちゃって。」

いや、ここは改まる場面だよ。

「面倒ついでにもう一つ頼んでいいかな。」

「何？ 借金？ うーん、五百万ぐらいなら何とかかなるけど。

珍しいわね、あなたがお金なんて。なんか困ってるの。」

いーひっひっひ・・・死ぬ。

なんか、もう、この人。

どうして、自分のことだとこんなに鈍感なの。人のこといえないけど。

「ちょっと、早く言いなさいよ。失礼ねえ。」

「姉さん、僕と、」

”お待たせいたしました、ミルクティでございます。”